北海道ヒグマ管理計画（第２期）
改定（概要版）

人とヒグマをすみ分け
地域のくらしをまもる

計画期間　令和4年（2022年）4月1日～令和9年（2027年）3月31日

改定：令和6年（2024年）12月26日

北海道

ヒグマ管理計画の改定にあたって

- 令和4年3月に策定したヒグマ管理計画（第2期）では、ヒグマによる人身被害の防止、人里への出没の抑制及び農業被害の軽減、ヒグマ地域個体群の存続を目標とし、取組を進めています。
- しかし、ヒグマの生息数は増加傾向にあり、近年は、人への警戒心が薄いヒグマが人里周辺に出没するようになり、農業被害額も増加するなど、人とヒグマとのあつれきはかつてないほど高まっています。
- 環境省は、人の生活圏で人身被害が増加するおそれがあることから、令和６年４月に、クマ類を、鳥獣保護管理法に基づく指定管理鳥獣に追加し、都道府県などによる集中的かつ広域的な管理を支援することとしました。
- 道では、こうした状況を踏まえ、これまでの取組に加え、あつれきの低減に向けて対策を強化することとし、計画の一部を改定しました。

〈計画改定のポイント〉 ―あつれきの低減に向けた方策の強化―

- ◆ 人とヒグマとの空間的なすみ分けを図る**ゾーニング管理の推進** (P5)
- ◆ 捕獲目標の設定による**個体数管理の実施** (P6)
- ◆ 生息数把握などの**モニタリングの充実** (P7)
- ◆ ヒグマに対応できる**専門人材の育成・確保** (P8)

1 北海道ヒグマ管理計画の概要

目的

ヒグマによる人身被害の防止、人里への出没の抑制及び農業被害の軽減並びにヒグマ地域個体群の存続を図ります。

計画期間

令和4(2022)年4月1日
〜
令和9(2027)年3月31日
←令和6(2024)年12月26日改定

目標

- ▶ 人身被害の発生を可能な限りゼロにし、人里への出没及び農業被害の発生を減少させる。
- ▶ 地域個体群を存続させる。

主な方策

❶ 人身被害防止、人里への出没抑制、農業被害の軽減のための方策
❷ ゾーニング管理の推進
❸ 個体数管理の実施
❹ モニタリングの充実
❺ ヒグマ管理に係る専門人材の育成・確保

2 ヒグマを取り巻く現状

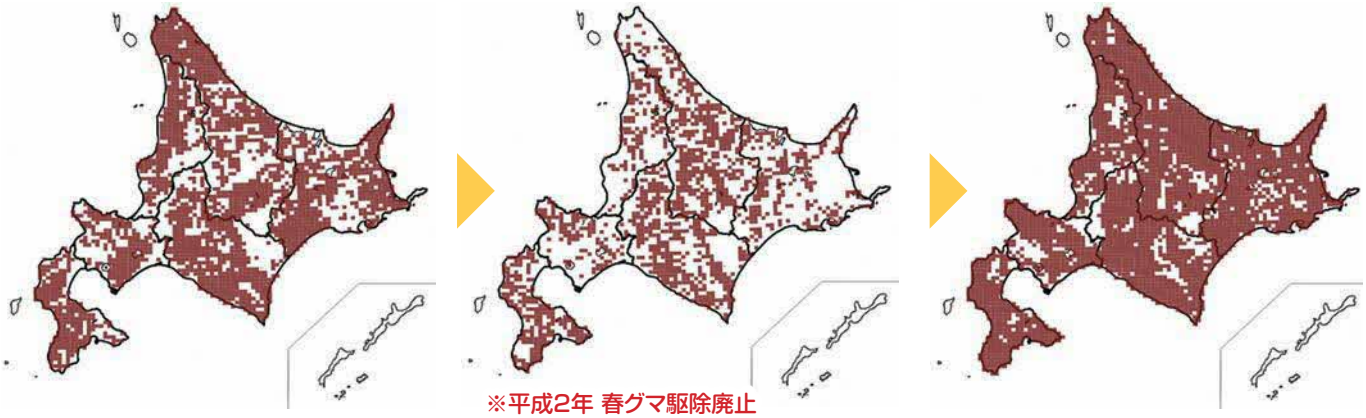
ヒグマの推定生息数は？

北海道のヒグマの生息数は、近年増加傾向にあります。

平成3（1991）年 5,440頭 → 2.1倍 → 令和5（2023）年 11,550頭

ヒグマの生息域は？

昭和53（1978）年　平成3（1991）年　平成29（2017）年

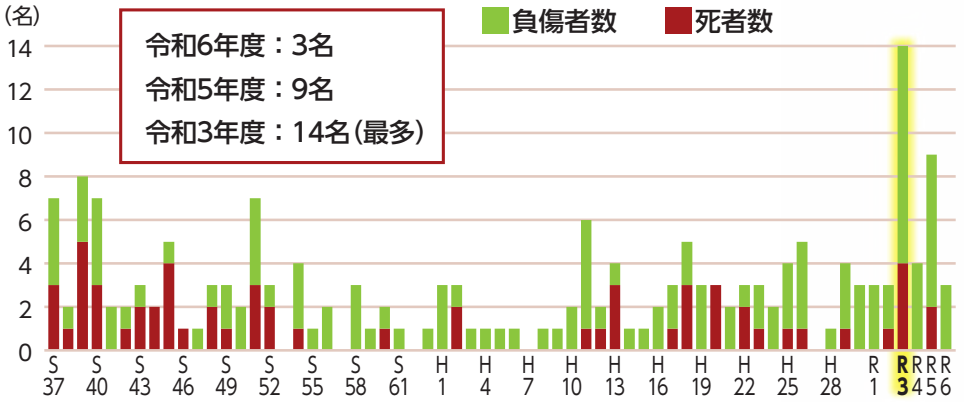


※平成2年 春グマ駆除廃止

※自然環境保全基礎調査（第５～７回）GIS データ（環境省生物多様性センター）を加工して作成

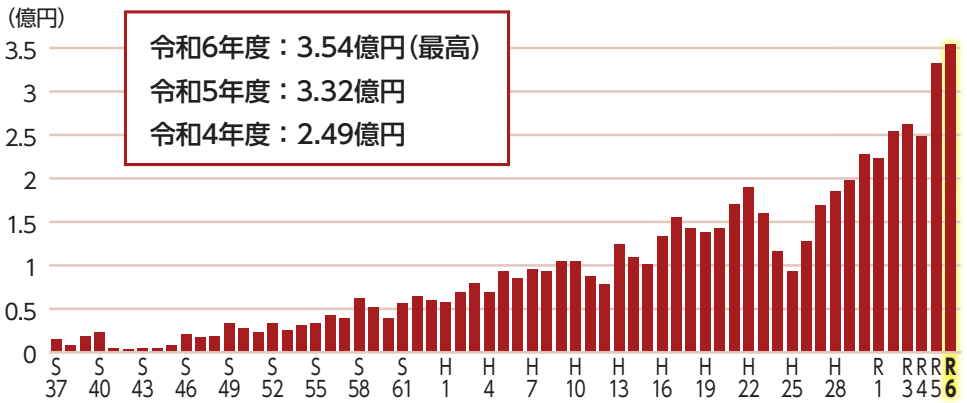
人身事故は？

ほぼ毎年、人身事故が発生しています。令和3年度は、14名が被害を受け、記録が残る中で過去最多となりました。



農業被害は？

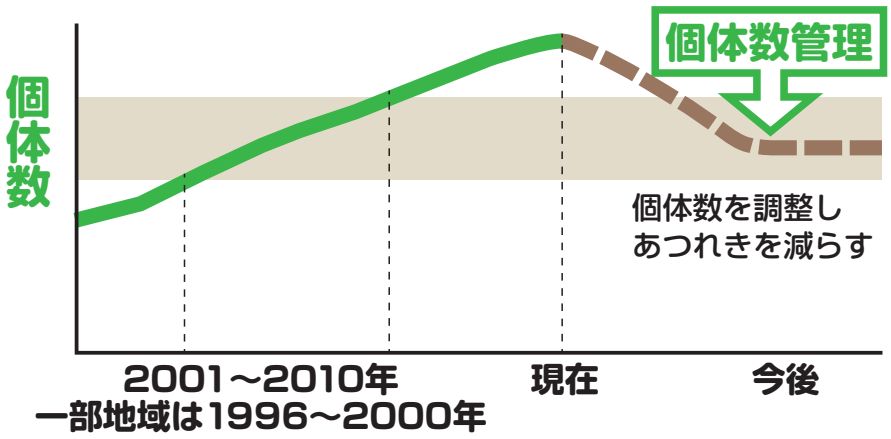
農業被害額は増加傾向にあります。令和6年度は3億5千４百万円で記録が残る中で過去最高となりました。



3 ヒグマ管理の考え方

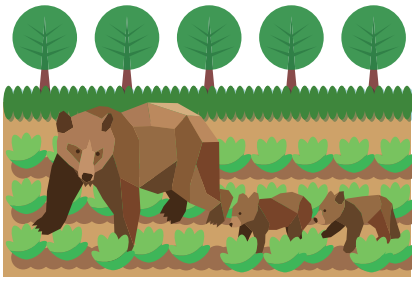
あつれきと個体数

個体数が増え、あつれきも高まっていることから、計画を改定し、ヒグマの出没が社会問題化していなかった頃（2001～2010年一部地域は1996～2000年）の個体数まで戻す「個体数管理」を行い、あつれきを減らす取組を進めます。



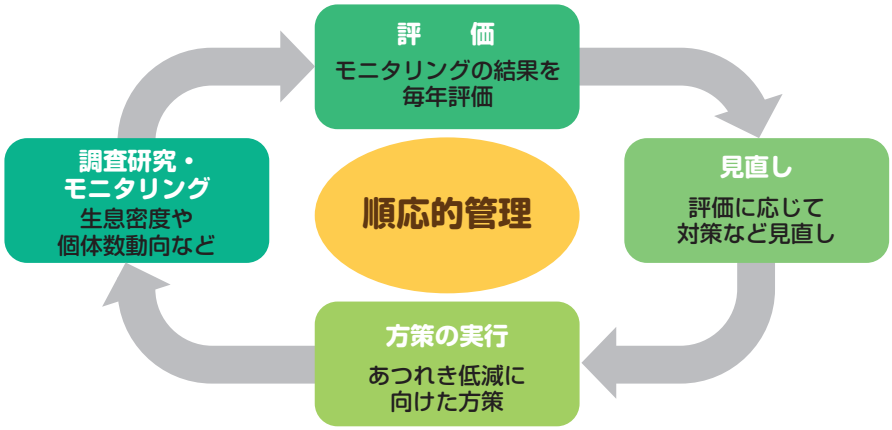
問題個体 とは?

学習によってゴミや農作物などに執着するなどして、あつれきを生みだしている個体を「問題個体」と言います。



順応的管理*

ヒグマ管理計画では、毎年、捕獲数などのデータを集め、生息状況やあつれきを評価し、対策を見直していきます。



*順応的管理 とは?

ヒグマなどの野生動物の分布や個体数、生息環境などの変化は予測が難しいことから、生息状況やあつれきを評価しながら、順応的に（状況の変化に合わせて）対策を見直していくことが必要です。

ヒグマ捕獲に従事されるハンターは重要です!

ヒグマ捕獲従事者は、地域の安全を守る上で、欠くことのできない存在です。こうした方々の社会的な重要性の周知や、安心して捕獲活動ができる環境づくりに取り組みます。

4 あつれき低減に向けた方策

①人身被害防止、人里への出没抑制、農業被害の軽減のための方策

人とヒグマのあつれきを減らすためには、ゴミや農作物の管理を徹底し、問題個体を発生させない取組など、道民一人一人がヒグマに対する正しい知識を持つことが重要です。

人への被害を防ぐために

- ヒグマに出遭わないためのルールなどについて、リーフレットやホームページなどを通じて周知します。
- 人が山野に入る機会が増える春と秋に「ヒグマ注意特別期間」として注意を呼びかけます。
- 人里への出没が多発したり、人身事故が発生、または発生が懸念される場合などは、ヒグマ注意報・警報*を出して、SNSなどで注意を呼びかけます。
- 秋の出没と関連するとされるヒグマの食物であるドングリなどの実なりの調査を行います。
- 市街地へのヒグマ出没に備えた研修や訓練を実施します。

市街地出没に備えた訓練

クマスプレーの使い方講習

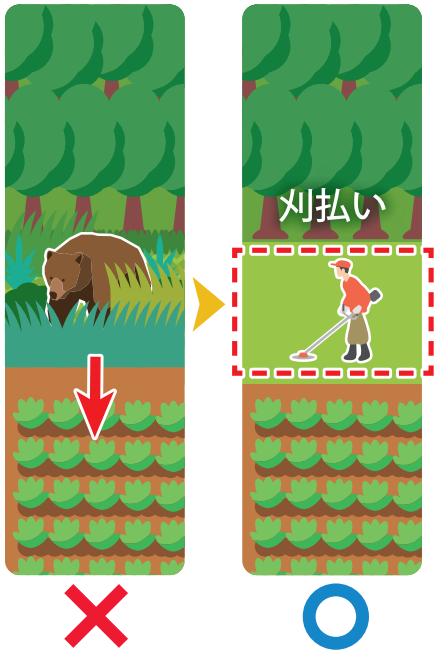
ヒグマを知るための
リーフレット

農業被害を軽減するために

- 農地と森林が接している場所では、電気柵の設置や農地周辺の刈払いを促進します。

刈払いにより見通しを良くすることでヒグマの侵入を防ぎ、農業被害を減らす効果が期待できます。

電気柵



*ヒグマ注意報・警報について

ヒグマが人里に出没した場合は、「Yahoo!防災速報」により周辺の地域住民に対して、注意を呼びかけています。

また、人里への出没が多発したり、人身事故が発生、または発生が懸念される場合などは、ヒグマ注意報や警報を発出し、SNSやホームページなどで広く注意を呼びかけています。

②ゾーニング管理の推進

人の生活圏やヒグマの生息地などのゾーンを設定し、それぞれのゾーンに応じた管理を行うことをゾーニング管理といいます。

ゾーニング管理をすることで、人とヒグマとの空間的なすみ分けを行い、効果的なあつれきの低減を図っていきます。

ゾーニング管理のイメージ

排除地域	防除地域	緩衝地帯	コア生息地
●市街地や集落の住居地域 ●ヒグマの侵入は許さない ●緊急的な市街地侵入対応を実施（捕獲など）	●農業、水産業などが盛んな地域 ●ヒグマを寄せ付けない ●農作物被害などを防ぐための捕獲や防除対策を実施	●身近な近郊林など（バッファーゾーン） ●被害を未然に防ぐ ●春期管理捕獲や個体数管理捕獲を実施	●奥山地域、森林地域 ●ヒグマの健全な個体群を維持するエリア ●ヒグマの生息に配慮

関係者によるゾーニングマップ作成の様子

- ゾーニング計画を住民や関係団体などと合意のもとで作成することで、地域の共通認識を共有することができます。
- 出没時に、対応の判断を迅速かつ的確に行い、速やかに問題解決を図るためにも有効です。
- 道では、「ガイドライン」を作成し、市町村のゾーニング計画策定を推進します。

③ 個体数管理の実施

- これまでの「個体群を存続させるための措置」だけでなく、人とヒグマとのあつれきの高まりを踏まえ、新たに「あつれき低減措置」を追加しました。
- 毎年、生息状況やあつれきを評価しながら、必要となる措置を見直していきます。

管理措置	対　応	
あつれき低減措置	あつれきが社会問題となっていなかった頃の個体数を目指し、捕獲目標と達成時期を定め、個体数管理を行います。	今回改定し追加
通常措置	あつれき低減と個体群存続の両立を図ります。	個体群を存続させるための措置
個体数回復措置	個体数の増加が期待できる捕獲上限数を設定し、地域個体群の回復を図ります。	
緊急保護措置	捕獲を抑制することで、地域個体群の絶滅を回避します。	

当面すべての地域で**「あつれき低減措置」**を行い、**個体数管理**を実施します。

2023（R5）年の推定個体数を基に算出した捕獲目標と達成時期

地域個体群		推定個体数（2023年）	目指す時期	目指す個体数	10年間の捕獲目標数（うちメス捕獲数）	達成時期
渡島半島		2,120	2001（H13）～2010（H22）年	1,600	2,250（700）	2034（R16）年
積丹・恵庭		850		420	1,030（330）	
天塩・増毛		980		460	1,200（380）	
道東・宗谷	西部	2,250	1996（H8）～2000（H12）年	2,000	2,220（690）	
	東部	1,290		940	1,390（470）	
日高・夕張		4,060	2001（H13）～2010（H22）年	2,800	4,450（1,560）	
合計		11,550		8,220	12,540（4,130）	

- 10年後（2034（R16）年）を待たずに捕獲目標を達成できるよう取り組み、早期のあつれき低減を目指します。
- 捕獲目標は、毎年、個体数を推定して、見直しを行います。

ヒグマの地域個体群について

ヒグマの生息地が、市街地などで分断されていることも考慮し、5つの地域個体群に区分し、さらに道東・宗谷地域については西部と東部に分けて、管理を行うこととしています。

捕獲目標の達成に向けて

問題個体の捕獲、春期管理捕獲、ゾーニング管理に基づく捕獲を組み合わせ、捕獲目標の達成に向けて取り組みます。

人里に隣接する緩衝地帯（バッファーゾーン）に生息する個体を中心に捕獲を強化し、効果的なあつれき低減を目指します。

■ **問題個体の捕獲**　多くのヒグマは、人を恐れて避けますが、人を見ても逃げない、農作物への被害を与える個体などは、問題個体として、その有害性に応じた対応を行います。

出没個体の有害性に応じた対応

有害性の段階	0（低）	1	2	3（高）
ヒグマの行動	人を恐れて避ける	人を見ても逃げない 人前にたびたび姿を見せる	農作物への被害 生ゴミ・廃棄物等につく	人身への被害
対応	経過観察など	必要に応じて見回りや看板設置など被害防止措置など	問題個体の排除など	問題個体の確実な排除

④ モニタリングの充実

ヒグマの管理を行うために必要な生息数などのデータを集めます。

痕跡調査

森林管理者の協力のもと、足跡や爪痕、フンなどヒグマの生息情報のデータを収集します。

足跡

爪痕

フン

捕獲個体の分析

捕獲個体の栄養状態などを分析します。

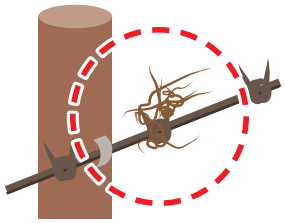
秋の実なり調査

ヒグマの秋の出没と関連があるとされるドングリなど山の実なりを調査し、注意喚起を行います。

ヘアトラップ調査

採取したヒグマの体毛のDNAを分析し、生息密度を調べます。

ヘアトラップの設置


有刺鉄線に付着した毛根を採取

DNA鑑定による個体識別

密度推定

■ 春期管理捕獲

見通しが良く、足跡を追跡できる残雪期に行う銃猟による捕獲です。

人里周辺のヒグマの生息密度を減らし、人に追われることで人への警戒心を持たせ、人里への出没を抑制します。

また、ベテランハンターに経験の浅い者が同行し、捕獲技術を習得する機会となっています。

■ ゾーニング管理に基づく捕獲

市町村のゾーニング計画策定を推進し、この計画に基づき捕獲を行います。

⑤ ヒグマ管理に係る専門人材の育成･確保

ヒグマ対策を進めるために必要なヒグマ捕獲従事者（ハンター）や専門的な知見をもった自治体職員の育成・確保を進めます。

捕獲従事者の育成･確保

- 振興局ごとに地域の実情や課題の把握
- 狩猟免許取得の促進を図る出前教室やフォーラム等による普及啓発
- 春期管理捕獲を活用した人材育成

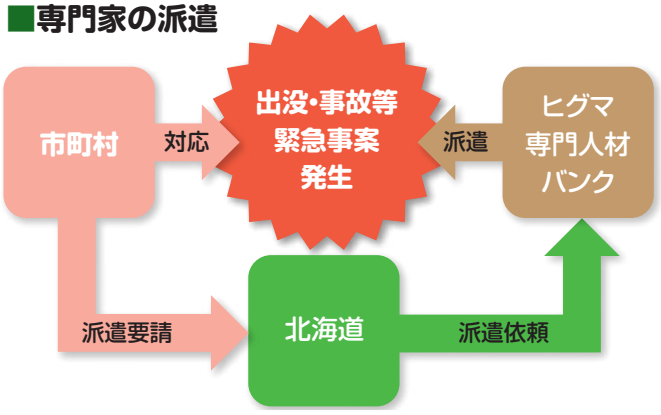
地方自治体職員の育成・確保

- 道や市町村職員を対象とした各種研修の実施

専門家の派遣

- 解決が困難な事案に対する地域への専門家派遣

■専門家の派遣



計画の実施体制について

▶地域連絡協議会

各(総合)振興局ごとで、道、市町村、猟友会、警察など地域の関係者間で認識の共有を図り、地域対応力の強化に取り組みます。

▶北海道ヒグマ保護管理検討会

有識者で構成し、ヒグマの生息状況や施策などについて、ご意見をいただきながら、計画の進行管理を行います。

ヒグマの被害にあわないために

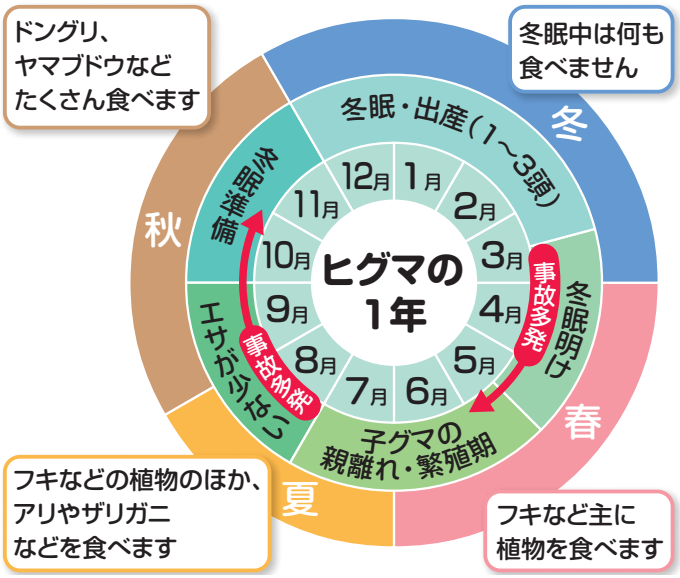
ヒグマの生態

ヒグマの行動圏は、メスで数㎢～数十㎢、オスでは数十㎢～1,000㎢を越える場合があり、オスの方が広い範囲を行動します。多くのヒグマは、警戒心が強く、人を避けて生活していますが、食べ物への執着がとても強いため、一度、生ゴミや果物、干し魚など人の食べ物の味を覚えてしまうと、それを目当てに出没を繰り返したり、人を恐れずに行動するようになります。

♂オス
体長…約2.0m
体重…約150～400kg

♀メス
体長…約1.5m
体重…約100～200kg

- 聴覚に優れ、音に対しては敏感。
- 昼夜を問わず行動できる視力を持つが、遠くのものはよく見えないようです。
- 嗅覚は敏感で、埋めた残飯などもすぐに見つけ出します。
- 動作は非常に機敏で、時速50キロほどで走ることができます。



人身事故を防ぐためには

登山・ハイキング・山菜採りなどでは特に注意！

- 出没情報のあるところには立ち入らない
- 野山などでは複数人で行動する
- 鈴や笛で音を出しながら歩く
- ヒグマの痕跡を見つけたら引き返す
- 早朝や夕方はヒグマの活動が活発になるので注意
- 渓流近くは周りの音が聞こえづらいので注意
- 万が一の場合に備えて、クマスプレーを携行する

人の食べ物の味をクマに覚えさせないためには

- 野外では、食べ物やゴミは必ず持ち帰る
- 家庭の生ゴミなどは野外に置かず適正に管理する
- ヒグマが好む作物は、電気柵で防御
- 絶対に餌を与えない

それでも会ってしまったら…

- 遠くにヒグマを見つけたら、その場から静かに立ち去る
- ヒグマがこちらに気づいても、あわてないで静かに立ち去る
- それでも近づいてきたらゆっくりと後退（走って逃げるのは自殺行為）
- 襲われそうになったらクマスプレー
- ナタやナイフで反撃して助かった例もある

事故事例の紹介

道立総合研究機構による分析

人身事故の発生要因は大きく3つに分けられます。ここでは、実際にあった人身事故事例とともに対策のポイントについて紹介します。

1. 防御的な攻撃

山菜採りの際や見通しの悪い場所で遭遇し、危険を感じたクマからの防衛行動としての攻撃や、子グマや食物（シカ死体など）を守るため攻撃。

事例 1

山林調査のため、男性が仲間から20～30m離れて見通しの悪いやぶの近くを歩いていた際、ヒグマ1頭がうなり声を上げながらやぶから飛び出してきた。男性は、走って逃げたが、押し倒されて負傷。クマスプレーを使う間はなかった。ヒグマは、すぐに男性から離れて逃げた。

- **事故発生時に子グマの鳴き声が確認されていることから、子グマを守るための母グマの防御的な攻撃と考えられる。**
- **被害者と仲間が離れて調査を行っていた結果、親子グマを囲い込む形となり、やぶの近くに居た被害者が襲われた可能性がある。**

対策のポイント

- ✓ 見通しの悪い環境では単独行動しない
- ✓ クマと遭遇した時は、背を向けて走らない
- ✓ 山林内では、常にヒグマの存在を想定し、クマスプレーの使用を想定しておく

2. 興味本位の接近からの攻撃

若いクマなどは、好奇心から人に接近してくることがあり、慌てて逃げる人に対して本能的に追いかけた結果としての攻撃。

事例 2

畑で作業中、ヒグマがネットを越え畑に侵入するのを女性が目撃、女性が逃げようとしたところをヒグマに攻撃された。目撃した男性がヒグマの撃退を試みたが、ヒグマは男性も攻撃し、その後逃走した。

- **人への警戒心の低いヒグマが畑近くにいたところ、人の気配に驚き攻撃したか、好奇心で近づき、背を向けて逃げた女性を本能的に追って攻撃したと考えられる。**

対策のポイント

- ✓ クマと遭遇した時は、背を向けて走らない
- ✓ ヒグマの生息地に隣接する農地では、ヒグマが出没する可能性があることを念頭に、電気柵を用いるなどの寄せ付けない対策が望まれる

3. 積極的攻撃

ゴミの味を覚えたクマや餌付けされたクマによる積極的な攻撃。

事例 3

登山道で休憩中、ヒグマが麓側の登山道から接近。声や音に反応する様子もなく男性1名に襲いかかってきた。ヒグマは、もう1名の男性にも攻撃したが、その際に男性によって首をナイフで刺され、その後立ち去った。

- **加害個体はこの事例の発生以前に人に危害を加えており、餌等を目的として積極的に攻撃した可能性が高いと考えられる。**
- **複数人で行動していたことが被害を最小限に抑えられた要因の一つとなったと考えられる。**
- **ヒグマが接近した際にクマスプレーがあれば撃退できていた可能性がある。**

対策のポイント

- ✓ 複数人で入山する
- ✓ クマスプレーを携帯する

ヒグマ検定

あなたや大切な人の命と暮らしを守る知恵を、
クイズで学んでみませんか。

例　題　ヒグマはどれくらい早く走ることができるでしょう？

1. 自転車と同じくらい
2. 陸上選手と同じくらい
3. 自動車（一般道）と同じくらい

PC／スマホからチャレンジ！

答え③。**続きは「ヒグマ検定」で。**

ヒグマを目撃したときは警察または自治体に連絡を！

最新の出没情報はこちら

- 北海道庁HP 市町村ヒグマ関連情報リンク集
- 北海道庁HP ヒグマ注意報
- Yahoo!防災速報 アプリ
- 北海道警察 地域情報発信室 X（旧Twitter）

北海道ヒグマ管理計画（第2期）改定（概要版）

北海道環境生活部自然環境局野生動物対策課ヒグマ対策室
〒060-8588　札幌市中央区北3条西6丁目
TEL 011-204-5988　　FAX 011-232-6790

北海道

令和8年（2026年）3月